# 婦人と新社會

山田わか主筆

## 四月號

### 研究と思想



### 批判と文藝



### 內外時事評




每月一回一日發行　第二號　大正九年四月一日發行

東京東洋出版社發行

山田わか女史著

新刊

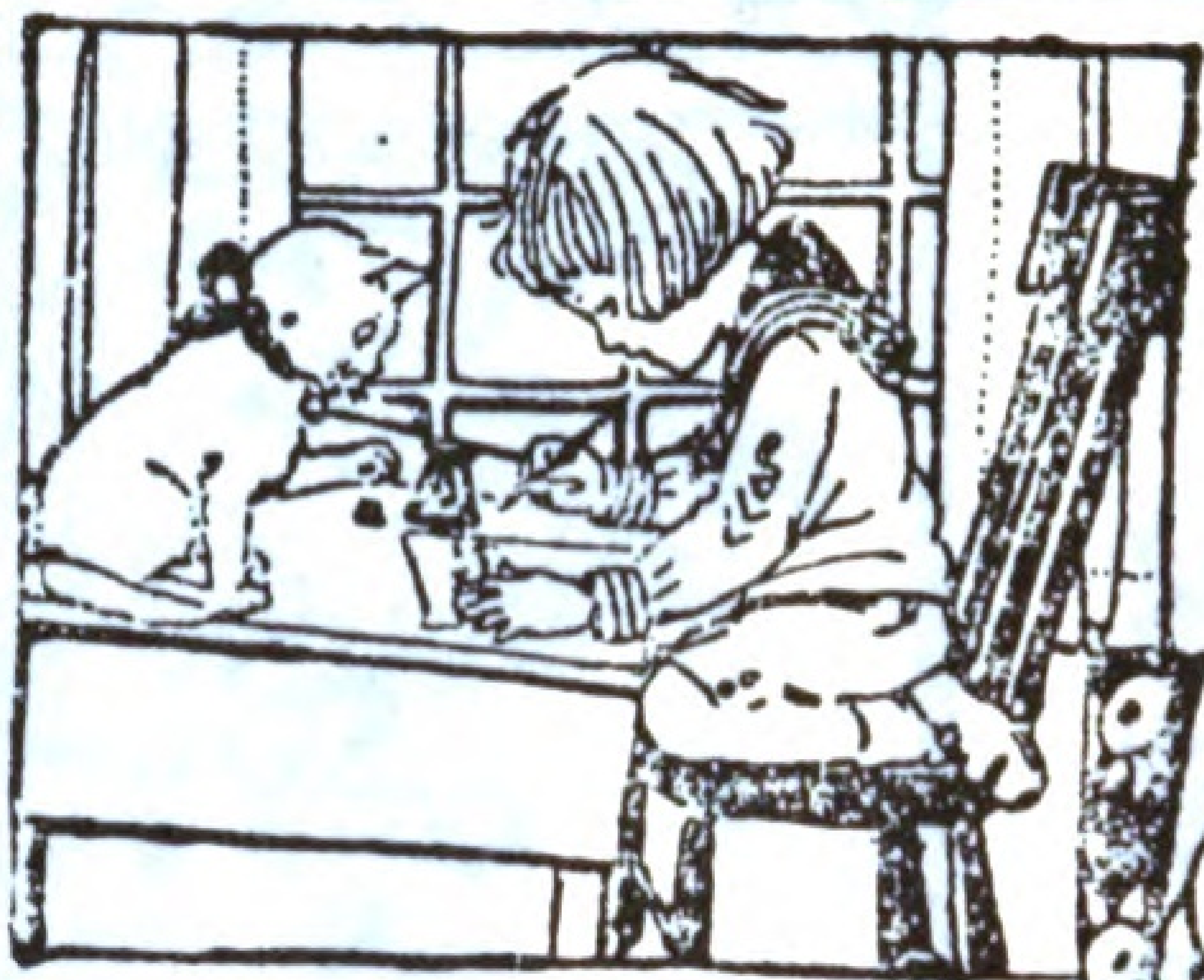
# 戀愛の社會的意義

四六版三百卅餘頁
定價金壹圓八拾錢
送料拾貳錢

目次大要

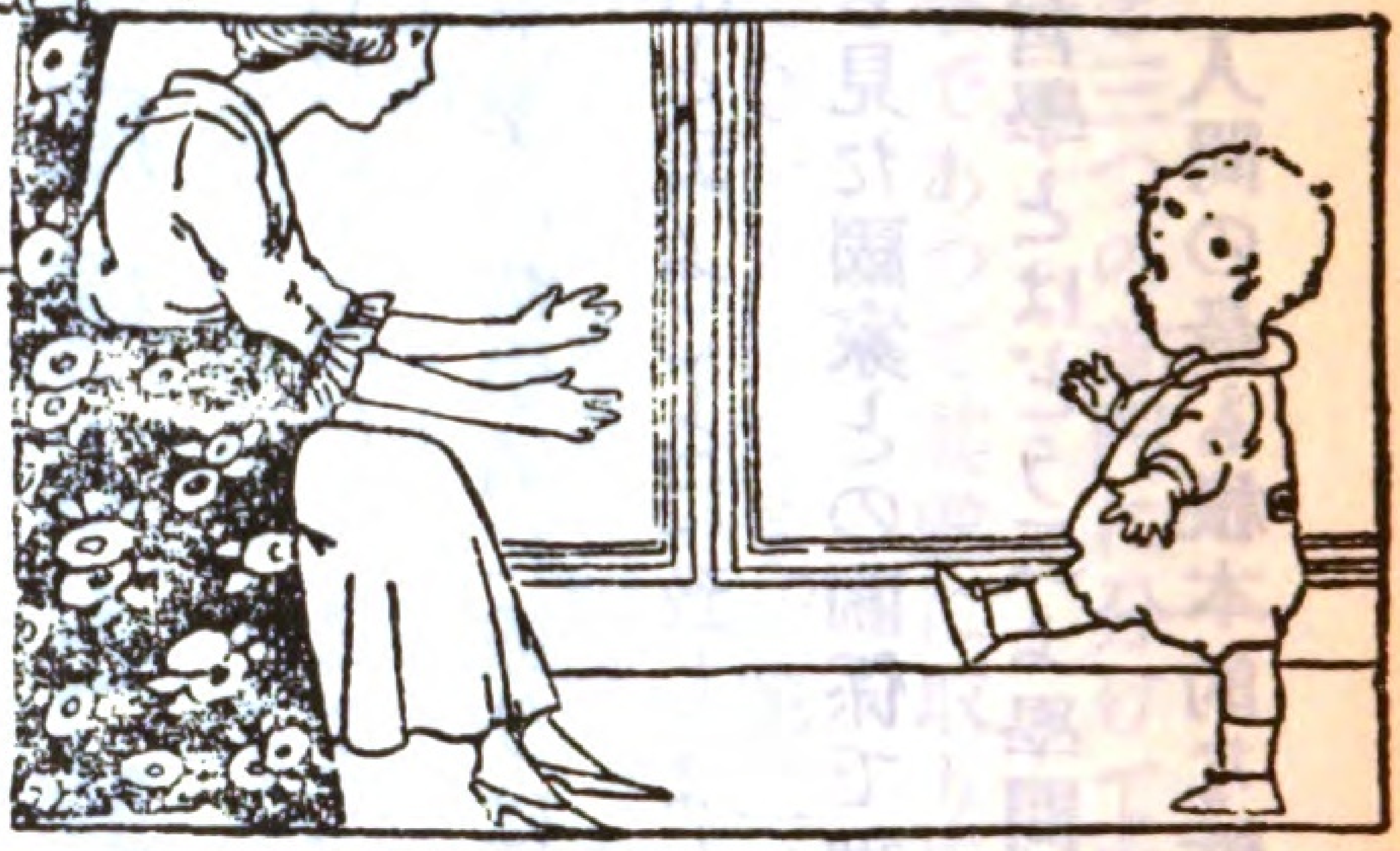
富を造る事と幸福を造る事と……戀愛と結婚……戀愛に對する男子の態度……菊榮氏の『女も進んで求婚すべし』に附て……結婚道德の一ツ……墮胎に附て……戀愛の自由と本能……女子敎育の基調……產業機關は臺所のため……戀愛と藝術……家庭を追はれた產業婦人……婦人運動の歸着點……メレデスの靈肉觀……母と社會改革……婦人の智的生活……禽獸の親子關係【其他十七問題】

發行所　振替東京四一〇七七番　東京市本郷區湯島四ノ三　東洋出版社



# 婦人と新社會

四月號



因習のかたい殼をかぶせられて弱く鈍くなつてゐた自分の目が目の前のものだけしか見得ない時に、夫の自由に發達を遂げた强い目は其の弱い鈍い自分の目に力を添へて、遠い明るい境地を見させて吳れました。自分は希望の翼をかりて一氣に其處へ飛んで行かうと致しました。けれども、自分の肉體は一氣に飛ぶことを許しません。ヤツパリ一歩々々と歩まなければ少しも進めませんでした。

そして、度々足は疲れて少しも動けないやうになりました。其の時に其の足の疲れを癒して吳れたものは誰でしたか？ それは子供でした。疲勞と倦怠とで足が地面に吸ひつきそうになつた時でも、小さい柔い溫い手が其の足にまつわると、重く沈靜してゐた自分の足の血は、俄かに、恰も靈氣に觸れたやうに踊り出してその循環を始めました。足も體も輕々しくなるのでした。そして、それ迄、嶮岨だと思つてゐた道がなめらかになるのでした。子供の未來を思ふ心は現在の苦痛を忽ち喜びの種に變へるのでした。



# 家庭婦人と政治

私が今お話したいと思ひますことは難しい言葉で申ますならば社會哲學の一章でありますが、私の淺學は哲學的に或ひは正確に科學的にお話することが出來ませんから、家庭婦人と政治と云ふことに致しました。つまり、社會哲學から見た家庭と、それから社會哲學から見た國家との關係で御座います。

一たい、社會哲學とはどう云ふ學問かと申ますと、この社會はどうして造くられてあるものか、又、人間の最も根本的な性質は何であるかを發見しやうとするものであり

まして、これを三つの部門に分けて申ますならば、其の第一は社會秩序の土臺は何であるかと云ふ事であつて其處に取り扱はれる問題は人間の性質と、社會の性質と、それから社會のできた方法です。第二は國民的の秩序と云ふ事でしてこの部門で取り扱ふ問題は家庭、教育、產業、國家、正義、社會理想と云ふ事です。そして、第三は世界的秩序と云ふ事でありまして、この部門で論ぜられるものに國際關係、宗教の位置文化の位置と云ふ順序になります。

で、私が唯今先づお話しやうとする事は今申上げました三つの部門のうちの第二に屬する國民的秩序のうちの家庭に付いてゞありまして、そして、その大體の項目を擧げて見ますならば、

(1) は家庭の自然的基礎。　(2) は家庭の因習的見方。
(3) は家庭の中心は子供であると云ふ事。　(4) は結婚。
(5) は家庭の教育的作用。　(6) は家庭の經濟的作用。

であります。

この(1)の家庭の自然的基礎と云ふのはどう云ふ事かと申ますと、人間には家庭が自然に喰付いてゐると云ふ事でして其の證據は高等動物が皆家庭を造つてゐると云ふ事によつても明らかであります。動物が高等になればなる程子供を世話すると云ふ事が重用な仕事になつて參ります。其の理由は動物が高等になればなる程、生れたての子供は意氣地がないものです。そして、その意氣地のない嬰兒を適當に發達させるための注意が益々重用になつて參ります。この意氣地のない子供を立派に育て上げると云ふ事はとりもなほさず文明の進歩であるのです。親が我が子を自分よりも立派な人間にしやう〳〵とした努力が人類の進歩になつたのです。

これに反して動物が下等であればある程生れたての子供はしつかりしてゐます。或る反芻動物は一定の棲家を持たずに始終あちらこちらと食物や水を探して歩いてゐるのだそうですが、その動物の母は產氣付くと一寸三四分間叢の中へ退いてお產をする

のですが、生れる子供は大抵一匹で、これは肉食動物の子のやうに意氣地のないものではなく、母が彼の體を舐めてゐるうち彼の五官が確に働くやうになり彼の體はすつかり確になつて、そして、母親の後について歩いて來るそうです。これに反して人間の子がお母さんの後に付いて歩くやうになる迄の親の苦心と手數は大したものです。

人間の兩親の本能がこの子供を育てると云ふ重用な仕事をどう云ふ方法によつて果して來たかと云ふ事に付いての詳細はこゝに略しますが、唯、この重大なる役目は家庭と云ふ一つの統一されたものによつてのみ果されて來たと云ふ事を明らかに申上げて置かなければなりません。子供を世話するに付いて最も重要な位置にあるものは勿論母でありますが、併し、全く意氣地のない子供を母が充分世話するには父の共力を待たなければなりません。そして、これが家庭の自然的の基礎であります。

子供を世話するに付いて最も都合のよい形式は何であるかと申ますと、その目的を最高に果し得るのが一番、よいのでして、そして長い話を短かくつゞめて申ますなら

ばそれは一夫一婦の家庭であるのです。一夫一婦の家庭が其の義務を果すに一番都合がよろしいのです。

こゝで私共が注意しなければならない事は理智の程度に於ては人間よりは遙に劣等な位置にある禽獣の方が人間よりも完全に子供を育てゝゐると云ふ事です。けれども禽獣は完全ではありますが同時に進歩と云ふものがありません。そして、彼等の完全の度は人間にとつて決して望ましいものではありません。何となれば彼等の進歩は止まつたものであるからです。けれども、人間の場合は不完全であると同時に其處に進歩の餘地があります。鳩の子はいつ迄も鳩の子でそれは決して鶴になりまん。けれども、人間の子は養育の仕方によつては鳩が鶴になります。親より優れた子供を見て鳥が鷹を生んだなど云ふ言葉がありますが、それは此處の消息を明らかにしたものだと私は思ひます。それから、禽獣でも人間でも同じ事ですが、殊に子供を優良に育て上げなければならない人間の母が子供を抱へてゐる間は確に一部分の獨立を失ふ事は止

むを得ません。そして、母親が失つたものはどうしても父親から補助されなければなりません。父親の補助を得ない事には婦人が非常に苦しむと同時にそれは人種の退歩を意味します。子供を世話する母親に父親が共力する事によつて人間は進歩致します。ですから、一夫一婦の家庭が最も有效なそして、自然の法則にかなつた家庭であるのです。これで、家庭の自然的基礎に付いてはほぼ申上げたやうに思ひます。

それから、(2)は家庭の因習的見方ですが、今迄御話して來たやうに家庭には强固な自然的な基礎があるにも拘らず、どうして、家庭を因習的に見るやうになつたかと申ますとそれは舊い〳〵處に其の原因をもつて居ります。昔、ローマでは家族と云ふと奴隷を意味したものだと云ひます。家族と云ふ言葉は一家に附ぞくしてゐる奴隷の集合名詞であつたのです。そして、後には奴隷計りでなく一家にぞくするものの凡てを含めるやうになつたのです。そして、その家族の所有主は勿論其の家の父でありました。これはローマ計りでなく何處でもそうのやうでありました。そして、今は家族を

戸主の奴隷と見る風習は無くなつたのでありますが、それでも、まだ〳〵一般の人の家族の概念は一家のものを奴隷視する傾きが殘つてゐます。

家族が一人の人の財産であるならば其の家族を外の財産と同じやうに取り扱ふのも無理はありません。從つて、父が多くの家畜や子供を所有すると同じやうに多くの妻を持つたり、又は、牛や馬を交換するやうに妻を交換するのも無理のない事でせう。そして、女がそう云ふ男との對等を要求し、そして、認められた時に女が自分の感情の動くまゝにいつでも夫を取りかへる事は當然な事であります。

こう云ふ風に見ますならば結婚は唯人爲的な一種の契約であつて其處に何等の神聖な意味も、自然的な基礎もありません。家庭を輕んずる風潮の源は此處にあつたものだと私は信じて居ります。そして、子供は決して家庭内の重用な一員ではないのです。其處で、家庭をこう云ふ風に因習的に見る事の替りに他の方面から見ねばならぬ事を主張致しますのが私の日頃の議論なので御座います。

其處で(3)の家庭の中心は子供であると云ふ考へに移らなければなりません。子供を家庭の自然の中心であると見ますならば、其處に兩親の人類的及び國家的の重要なる役目が出來てきます。もし、私共が家庭を小さい國家と見ますならば、子供は其の國家の正當なる主權者であるのです。そして、主權者としての敎養を子供に與ふる事が兩親の最高な使命になります。と云つても子供の希望が常に殘らず實現されるものではありません。殊に子供の數の多い時にそうです。けれども、兩親は常に子供には最善をつくしてゐます。この最善を爲すと云ふ事が普通の家庭の作用であります。そして、その目的は親自身よりも子供を社會の一員としてより價値あるものとしやうとする、これが兩親の最高なる使命であるのです。家庭の他の作用は皆この作用に從ぞくすべきものであります。

子供を育てると云ふ事が家庭の自然の則ち論理的の基礎であると云ふ事を私はかたく信ずるものでありますが、併し、論理的に第一に位ひするものでも、時間から申ま

すとそれが第一のものではないやうに一寸は考へられます。則ち、家庭は兩性の結合によつて成り立つものであり、そして、其の兩性の結合が必ず子供を持つものだと定まつても居らず、且つ又、男女の同棲は子供を育てると云ふ根本的の仕事が終つた後迄も續いて居るものでありますから、どうも家庭の根本基礎は子供を世話する事よりも、むしろ、夫婦關係を家庭の基礎として見る方がより適當であるやうに思へます。

これが實に家庭の基礎であるやうに思へます。

處で、よく考へて見ますとこの夫婦關係は親子關係に從ぞくすべきものであると云ふ事が分つて參ります。なぜなら、同じ女性同志或ひは男性同志、又は兄弟姉妹の間に強い愛がある事があります。そして、これが大變幸福な、そして價値ある結合となる事があります。けれども、これは、決して家庭にはなりません。結婚による結合をかう云ふ種類の結合と區別致しますには世話すべき子供があるのが普通だからでありま す。同性間の愛や兄弟姉妹の愛が家庭關係、則ち、親子關係の愛よりもより立派な、

そして、より價値のある場合もありますけれど、併し、それは家庭の根本基礎となる事はできないのであります。そこで、家庭の中心は父でもなく、母でもなく、又、夫婦でもなく子供であると云ふ事が明らかになつて參ります。

其處で、家庭の自然的基礎が子供が生れると云ふ事である以上は子供の心身の强壯と云ふ事が重大事になつて參ります。此の事に關しては、いろ〳〵の研究の結果、善種學なるものが出來ましたが、そして、其の善種學の目的は家庭の自然的基礎を强固にするものでありますが、この善種學の話も今は略して置きます。

それから、(4)は結婚でありますが。この結婚は家庭の重要な條件中で第二に位ひするものであります。そして、前にお話した第一の家庭の基礎を確立するには、此の第二の家庭の基礎を確立して置かなければなりません。則ち、家庭と云ふものに神聖な意義と永久性を與へる必要があるのです。自然は人間に一種の强い力を與へまして、家庭の基礎を築かせやうと致しました。則ち、その强い力とは戀愛です。兩性の結合

はお互ひに助け合ひをしなければなりませんが、それは、戀愛の力によつて行はれてゐます。從つて男女間の自然の引力、則ち、戀愛は同棲する事によつて弱くなるよりは強くなるべきものであります。同棲する事によつてお互ひの愛が強くなるか、弱くなるかによつて其の愛が眞實であつたか無かつたかゞ分ります。愛も矢張り子供と同じやうに、夫婦の同棲が長ければ長い程成長し強くならねばならぬものです。

一たい、人間の性質は動物の性質のやうに一定不變のものではありません。男も女も彼等の趣味、思想、感情の上に常に變化を受けます。そして、其の變化が度々離婚の原因になります。ですから、最初の愛をます〱強くして其の變化に對抗させなければなりません。そして、其の對抗力を補助するものは宗教、法律、又は、一般の情操であり、そして、其のうちでも最も重要な力は子供を育てると云ふ社會的奉仕であります。

子供を育てると云ふ事が最も重大なものであつて、其の次に位ひする重大なものは母を擁護する事でありますが、結婚關係を粗略に取り扱つてゐる以上はこの二ツの使

命は完全には果せません。で、理想的なこの狀態を造り出すには、どうしても、本當の戀愛を基礎にした結婚の外には方法がありません。眞の戀愛を基礎にした結婚によつて子供の世話は充分に出來ますし、夫が妻に共力する事も出來ます。

その次にお話するものは、(5)であつて家庭の敎育的作用でありますが、これは敎育的感化力の中心は家庭であると云ふのです。子供は一番先きに本能的に發達して行きますから、子供の敎育は本能敎育が一番先きでなければなりません。其の本能敎育に成功する事によつて、智育體育も亦成功するのであります。

兩親並びに子供は家庭其のものから非常に敎育上の利益を得るものです。人間は敎へる事によつて學ぶものであると云はれてゐますが、子供の心に或るものを注ぎ込まうとする努力が兩親の思想を精選致します。そして、その大切な本能の敎育は家庭でなければ出來ない事です。

(6)最後に御話しなければなりませんのは家庭の經濟的作用であります。家庭生活に

經濟上の安定が必要であると云ふ事は御話しする迄もありません。そして、子供を世話する事が母の任務であると同時に家庭の經濟上の基礎を造るのが父の任務であります。家庭の經濟上の缺乏は家庭の統一を破壞する事があります。と云ふのは父親の收入が家庭を支へきれない時には母親も經濟的な仕事をしなければなりませんから、從つて、子供の世話が充分出來ない事になります。この點に付いては私は折りのあるたんびに幾度も〳〵書いて居ります。

以上御話して參りましたやうにこの家庭と云ふものは社會の諸制度のうちで人間の心に最も深い根をはつて居るものであります。家庭程人間に深い交渉をもつてゐる制度は外にありません。しかるに、この家庭を輕く見やう〳〵とする風潮は、前に御話し致しました家庭を因習的に見る習慣の結果、つまり、家族を奴隷と見た誤まつた考への結果であり、又、社會現象を研究する人々がこの家庭を研究する事を忘れてゐたと云ふのは、これも、矢張り、前に御話し致しましたやうに、この家庭が余まりに自分

達に密接してゐるので、ツイ氣が付かずに居たのであらうと私は思つて居ます。一切の社會問題が皆家庭の安定と家庭の向上を計るものだと云つても決してそれが誇張した言葉ではありません。資産があつてもなくても人は一定の年頃になると皆家庭を持ちます。家庭がある以上必ず其の家庭には中心があります。そして、其の中心は前にも御話したやうに子供を一人前の社會員にしやうと云ふ事です。世の中に出しても押しも押されもしない人間に子供をしやう。自分等よりも立派な人間に子供を仕上げやうと思はない人は無いでせう。

この社會にとつても、又、國家にとつても重用な國民の家庭生活の保護の任を委ねる處は國家です。國家が國民の安寧秩序を計ると云ふ事は各國民の家庭生活の安全を計る事です。其の家庭の主權者、則ち、子供のためには母は總理大臣の位置にあるものです。家庭の總理大臣である母が、其の家庭の保護をもつて任じてゐる國家に對して發言權を持たねばならぬと云ふ事は余まりに明瞭な事ではないでせうか。國の基礎

たる家庭を整理し、次の國民を創造する大任を持つ婦人が國家に對して發言權を持つてゐないと云ふ事が却つて人間の社會生活から見て變則であると私は思つて居ります。婦人が家庭擁護のために政治に參與する事によつて、家庭の安定が計れます。國家の基礎を强固にする事が出來ます。

凡ての制度の第一の目的は社會進步の增進であります。如何なる政體も、如何なる産業政策も、亦、如何なる倫理も、國の東西を問はず皆社會進步を增進させる計畫に外ならないのです。

國家を代表する政府の形式はいろ〳〵ありましたが、過去數千年間に於けるあらゆる大小の政府の第一の仕事は國民に衣食住の資料を供給する事でありました。政府の一大義務は、國民が正當なる國民としての義務を果して居る以上は、必ず衣食住の安定を國民が得られるやう施政しなければなりません。

「食物の缺乏は困難を意味し、物價の高い事は騷擾を意味し、饑饉は無政府狀態の

母である。』とフーヴアー氏は云つてゐます。そして、其の食物及び其の他の物資を消費するものは、男も勿論消費しますが、先づそれは一家を整理して行く婦人でありま す。ですから、食物及び其の他の物資の整理に實驗ある婦人の要求を聽取する事は國家にとつても國民を整理して行く上に大ひに利益であろうと思ひます。ですから、政府にとつては國民のうちの男子よりも婦人の方と一層密着な關係があるのです。處が事實は全くそれと反對で婦人は政事に參與してゐませんでした。この頃、やうやく其の要求の聲が盛んになつたのですが。

この婦人が全く政治に參與しなかつたのは男子の横暴があつたには相違ないのですが、婦人の理智が余まりに幼稚で今日の社會組織である共同生活の訓練を缺いてゐた處にも大きな原因があります。婦人の理智が鈍つてゐたのは今迄の横暴な男子から壓迫されてゐた結果である事は勿論ですが。

婦人の政治參與の必要は今迄に申上げましたやうな理由で自明の理ではありますが婦人が其の資格を造る事が先づ重用です。亞米利加の植民時代には婦人が素晴しい權勢を持つてゐまして、植民憲法の下に殆んど百年間婦人は政府の役人を選擧する覺格

を持つてゐました。けれども一七七六年婦人は其の權利を失つてしまいました。

又、亞米利加のアイダホ州の首府ボイゼに於ては婦人が參政權を得てから十年になりますが、婦人が政權を持つた當時は禁酒運動、賣笑婦撲滅運動など、なか〳〵盛んでありまして、其の效果も著しいものであつたと云ふ事でありますが、併し、十五年後の今日に於ては、それ等の婦人の政權が酒の税を安くする法案を可決したり、賣笑婦の取締りがゆるんで行つたりしてゐると云ふ事です。又コロラド州に於てはアイダホ州と同じく婦人間の投票賣買が男子間よりも一層烈しいものであると云ふ事です。

これ等の例が示してゐる婦人の政治的良心の墮落は、婦人が女性としての立場から自覺して持つた政見ではなく、單なる男子の模倣であつたからだと思ひます。

我々日本婦人は先つ婦人の使命を明らかにした上、充分に政權を利用し得る資格を造つた上、家庭擁護のため、より良き國民を創造するために婦人參政權を獲得しなければなりません。單に男子を模倣しての政權は徒らに政界を混雜させ婦人の墮落を誘致するものであります。

# 家庭と家屋と文明と

家屋は人の健康、道德、威嚴、快樂などと密接な關係があるものである。人生の價値と道德の中心である家庭はこの家屋內につくられる。そして、子供や青年のためには家庭は最も愉快な場所、中年のためには滿足な場所、老年のためには最も平和な場所であるべき筈である。けれども、もし、それがあばら家であつたり、何等の情味もなかつたりするならば、つまり、入るにも氣持ちが惡いやうな狀態であつたならば人はツイ屋外に娛樂を求めるやうになる。殊に青年期少年期に於てさうである。彼等の若い血は不潔な陰氣な屋內にはヂッとしては居られないのである。自重、威嚴、慰安と云ふやうなものは決して、虛飾や贅澤によつて得られるものではなく、我が家の居心地のよいことによつて養はれるものである。

多くの貧民窟に於ては眞夏の暑い時分には子供は夜更ける迄外をブラ〱遊んで歩

いてゐる。こう云ふ處の家は風通しが悪いし、日光もさゝないから病菌はどん〳〵養成される計りで空氣自身が既でに病毒である。一軒のうちは大抵一間か二間で、其處で煮焚もすれば洗濯もする。湯もつかへば寢もする。其の上に時とすると其の中へ寄宿者を置くことさへある。

そう云ふ處では勿論死亡率が高い。一間に住んでゐる家族は一般人口の死亡率の八倍、二間に住んでゐる家族の死亡率は四倍、三間に住んでゐる家族の死亡率は二倍と云ふ割であると云ふことである。こう云ふ恐しく高い死亡率は家が惡い計りでなく周圍の不潔にもよると云ふことは勿論である。

金と趣味があつて町外れに住む者は家の内外を愉快に造るけれども、町外れの長屋は市内の貧民窟よりも却つて不愉快である。樹木のかげもなければ、雜草や石ころの中へ建てゝあつて、そして、下水の裝置も何もないから市内の貧民窟よりも却つて不潔である。田舍の貧乏な百姓の家は都會の貧民窟の家よりもまだ甚しいのがある。故

に、彼等が都の美にあこがれるのも或ひは無理がないかも知れない。彼等には自然の美を樂しむと云ふやうな趣味は勿論ないから。

一口に貧民窟と云ふと貧民窟は生活費が非常に安いやうに思へるが事實は決してそうではないそうである。彼等の仕拂ふ金は大きなもので組織を變へたならば正當な家に住むことが出來る程の高であると云ふことである。その證據には家主の方から云ふと、丁度、貧乏人相手の質屋が大きな利益を得るやうに、最下等な長屋が最も有利だと云ふことである。故に、無制限な競爭にこれを任して置くならば下級勞働者は到底人間が住むには堪へないやうな家に計り住まなければならないやうになつてしまう。

これを救濟する方法を或る學者は二ツ擧げてゐる。

第一、同胞主義の精神から資本家が四分か五分の金利で滿足するやうにする。社會改良の實驗はどうしても個人から始めねばならぬからして、先づ資本家が暴利をむさぼる家主を向ふへ廻して貧民のために相當な家屋を提供する。貧民だからと云つてそ

れ相當な家賃は拂つてゐるのだからして相當な家を與へても安い金利には必ずなる。そして、其の有效さが證明された時には國家又は市が其の仕事を引き受けて大規模に始むべきである。これが歐洲諸國に於ける社會學を應用した社會改良運動の歴史である。

第二のものは、政府の干渉を要求することである。則ち、常識に富んだ專門技師をして貧民窟を調べさせ、衛生上許すべからざる家屋は家主に修繕を迫るなり、又は、とりこわさせるなりするのである。そして、それを法律にするのである。處で、法律をつくるのは容易だが、その法律を有效に働かせるには常識と科學を兼ねそなへた人物を得なければならないから、其れはなか〱困難ではあるが、併し、不可能なことではない。そして家を新築する場合には一定の家屋建築法に從はせるのである。そうして家屋の混雜を防ぐのである。

もう一つの家屋問題解決の方法は、政府と個人が共同して長屋を建築することであ

る。則ち、政府の補助の下に長屋を建てゝ、そして、家賃は一定の價格を越へてはならぬと云ふ規定を置くのである。

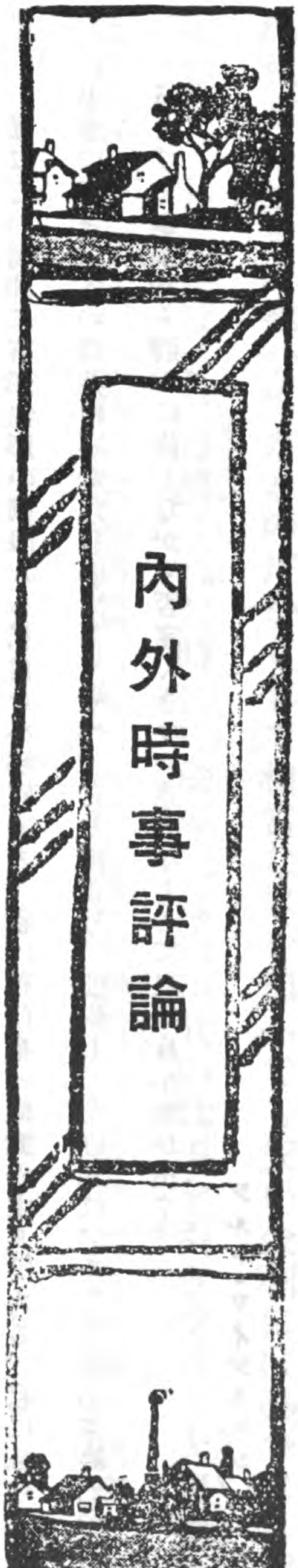
歐米各國に於ては建築會社が町外れの地面を買つては其處に理想的な家屋を建築しそして會社の株主や社員に家を提供すると云ふ仕組みになつてゐるのがいくらもあると云ふことである。これも家屋改良の有望な仕方である。

いづれにしろ、何は置いても下層階級に家屋改良の必要を悟らせるのが最も緊急なことであろう。

---

私はこの瞬間に有形無形の制限から私自身を解放する。私は私自身の絶對の主人である。私は私の喜ぶ處に行き、人の言葉に耳かたむけ、よく考へ、立ち止まり、捜索し、受け入れ、そして私を束縛しやうとする制限から靜かに併しながら否定できない意志をもつて私自身を奪ひ出す。

ワルト・ウイットマン




## 原宰相と議會解散

この頃は妙なことが流行して、何でも大言壯語して政府の悪口でも云つて居れば、それが直ちに新人であり志士でゝもあるやうに心得てゐる愚物が少なくない存在する理由あつて存在する政府を唯無茶苦茶に攻撃して見たり、とにもかくにも政府の内部へ這入つて國政を司つてゐる人達をまるで國賊でゝもあるやうに微塵程の尊敬を拂ふこともせず、攻撃さへして居ればいゝやうな、そして、野に居るものは皆志士で民衆は皆完全な人間であるやうな態度を持つてゐる人間に私は無限の反感をもつてゐる。『今回の解散程意味の分らない解散はない』と云ふのを冒頭に殆んど凡ての思想家政治家及び諸新聞が皆口を極めて解散を敢てした原氏を非難して、そして、國務と黨略の混同であるとか國權濫用であるとか云ふ言辭を並べてゐる。

實際、普選案は唯名を託されたものであろうと考へられるふしも無くはない。けれども、政治は唯一片の理論では無いから裏に又裏のあることも止むを得ないであらうと私は考へる。普選案は看板で實は外交の行き詰りであるとか、黨勢擴張の魂膽であるとか云ふけれども、外交の行き詰りは原内閣計りでなく、歴代の内閣の常態であつた。又、黨勢の擴張と云ふこともあながち非難すべき性質のものではない。自黨の勢力擴張を出來るだけ計らうとするのはどの黨でも同じである。加藤氏、犬養氏皆同様ではないか。野黨の勢力扶殖はい丶が内閣を造つてゐる政黨が黨勢を張つては、ならないと云ふことも無さそうなものである。のみならず原宰相の『單純なる選　權の擴張に非ずして…………社會組織を脅威するもの……………』と云ふ解散の理由の一ッは原宰相の詭辯ではないと私は思つてゐる。なぜなればあの普選運動の狀態はどうであらうか、確かにあれは正當な民意を代表した責任觀念のある正々堂々たる權利の主張ではない。あの二月二十三日の芝公園に於ける普選促進大會の後を見ると、會場にあつたあらゆる器具が、皆メチャ〳〵に破壞されてあつたと云ふではないか。デモクラシーの精神を體得し國民の意志を代表する資格のあるものならばそのやうな亂暴狼藉はしない筈である。そう云ふ平氣で物こわしをするやうな責任觀念の痲痺した人間が國政に參與するこ

とは危險千萬なことである。或る民衆の一人は自分の行動に干渉する一警官に向つて『陛下の赤子である我々を』と云つてたんかをきつたと云ふことであるが、實に抱腹絶倒とはこのことである。陛下の赤子をもつて自ら任ずるなら、もう少し自重して、警官と衝突するやうな擧に出ないがよい。そして、國民を代表してなど、大言する連中も、皆、この『赤子組み』であらうと私は想像してゐる。同じく國民である少なくとも私共は決してそれ等の人に代表して貰つてはゐない。そう云ふ無自覺無反省な誇大妄想狂に道理を云つて分る筈が無いから、矢張り、それ等は國權をもつて押へ付ける必要がある。良民保護のために。

あの普選運動の亂雜無秩序な光景は其の運動者等が無自覺無反省であつて國民としての義務を忘れ徒らに權利呼りをして愚民を煽動する不良分子、則ち、原氏の云ふ社會組織を脅威する危險分子であることを證據だてゝゐるものである。其の亂雜無秩序を背景として逆上し混亂した議會に對しては解散の聲は確かに有效な一服の清涼劑だと私は思つてゐる。

神ならぬ人間を精密に見るならば誰にでも缺點はある。原氏にでも感心出來ない點が無くはない。が、大體に於て、先づ原氏は當代に得がたき大政治家である今日とにかく頭角を現してゐる政治家も可なりにあるが、併し、現に原氏だけの仕事をしてのけた、そして、あれだけの

勢力をもつてゐるものは外にないではないか。

私は曾て英國の國會史を讀んで英國で傑出してゐた政治家が次のやうに云つたのを覺へてゐる。『偉大なる政治家とは偉大なる考へを持つた人である。そして、偉大なる考へとは全國民と直接交渉ある考へである。』と。で、私は亂雜無秩序に陷つた國會を解散して直接國民の意に問はんとした原氏の考へは確かに大きな考へだと思つてゐる。英國の政治家の云つた偉大な考への持主は原敬氏であると思つてゐる。

いづれにしろ、私は婦人としての立場から今回の解散をむしろ原宰相に感謝してゐる。今や全國の婦人は將に長きねむりから醒めて動き出そうとしてゐる。この際に國會議員の改選は婦人のために好機會である。婦人は今は直接政治に參與することこそできないが、併し、その覺悟と努力によつてはあらゆる方面から政界に一大勢力を植へ付けることが出來る。

婦人の利益と婦人の權利を無視するやうな又は愚民を煽動することを仕事としてゐるやうな無責任な候補者はどし〳〵突き落すやうに陰に陽に婦人は働かなければならない。夫を通し、父を通し、子息を通して、婦人の利益、從つて人類の利益を尊重し得るやうな本當に文字通りの選良をこの次の議會へ送り得やうに我々婦人は努力しなければならないのである。

（委しくは雄辯四月號に書いた）

# 怠業問題

市民に非常な迷惑を與へてゐた電車從業員の怠業問題もやうやく從業員が滿足出來るやうな解決を得て、市中の交通機關が舊に復し、市民はやうやく安堵の胸をなで下したが、併し、勞働者の氣勢が非常にあがつてゐる今日、いつ又どんな處にどんな怠業が起つて、いつ、どんな迷惑を我々は蒙らされるかも知れない。故に、勞働者のこの怠業問題に付いては我々は、殊に、我々婦人は一考して置く必要がある。

サボタージの意義や歴史が何であらうとも、結果から見ればサボタージは機械の破壞、仕事の損害、結局富の破壞であることは明らかである。これ等の手段は無政府主義、及び、社會主義に附隨して起つたものには相違ないが、併し、これ等は無政府主義とも又は社會主義とも根本的には關係ないものである。

I. W. W. の唯一の武器は同情的同盟罷業（一ツの職業がストライキを始めると其れに關聯した職業が其れに同情して又ストライキを始め、次ぎから次ぎへとストライキを擴げて行く）を出來るだけ廣く行ふことであり、そして暴力に訴ふることであり、それが信條である。彼等は信じてゐる。『如何なる戰爭も勞働者の權利のための戰爭よりもより理由ある戰爭はない、如何なる軍人も勞働者の權利のための戰爭よりもより正常な理由を持

たない』と。

もし、それが社會正義を確かにする唯一の方法であつて、そして、他に方法がどうしても無いならばそれも止むを得ないかも知れない。けれども、それ等の方法のどれもが社會正義を得る方法でもなく、又、他にも方法がある以上は暴力に訴へることや總同盟罷業は馬鹿氣たことであり、非文明的であり、そして、罪悪である。

一體、大規模の社會改革は決して一日で出來るものではない。が、昔より今日に至る迄今日程社會改革の功績をあげるに於て速かなことは無かつた。其の速かな改革の功績のうちにも勞働條件の則ち生活條件の改革は殊に著しかつた。この著々と現れて行く生活改善の進歩を妨げるものは其の名は何であれ、又、その主張が何處にあろうとも其れは絶對に排斥しなければならない。

社會は全體として生活改善の權利をもつてゐる。そして、其の改善を進めて行くに付いては前記の二者、則ち、總同盟罷業と、暴力の適用は絶對に敵である。何となれば、この二つの方法は凡ての社會秩序を無視するものであるから。

西洋諸國に於ける勞働者間には社會主義や無政府主義の論理を耽讀するものが澤山あるし、我が國にも今は少くないと思ふが、併し、無政府主義や社會主義は前にも云つた通り決して暴力や總同盟罷業を教へるものではなく。バクニンやネ

チャイフやモストが無政府主義を主張し同時に暴力を宣傳したと云つても、その暴力は彼等の主義からではなく、彼等が二重性をもつてゐたのである。則ち、無政府主義の主張と暴力の主張とは相反するものであるが、唯、無政府主義の主張は社會關係を餘まりに單純視し、空想化する弊がある。複雜なものを單純視し空想化し、易々と結論をひくことには敢へて我々は反對する必要はないが、併し、その安價な結論が、病的思想、むしろ、病的感情の表現である暴力の梶となつて活動する時に、社會の一員として我々は默しては居られない義務がある。

　權威ある無政府主義者は、彼等の主張と暴力とは無關係であることを宣言してゐるし、エマ・ゴールドマンなども『破壞的な暴力の主張者は無政府論を讀んだ結果でなく、むしろ、生活の壓迫から出立してゐる』と云つてゐるが、こう考へて來ると、今回の電車從業員が市民に非常な苦痛を與へ、有形無形の損害を與へた彼の暴力的サボタージは果して生活の壓迫から來てゐるかどうかを考へなければならない。

　實際、生活の壓迫から來てゐるのだとすると、それは容易ならない問題である。正當に働いてゐる以上は正當に生活する權到を誰でも持つてゐるのだからして我々も市民の一員として彼等のために大いに努力する處があらねばならない。自分等の生活の一部分、則ち、自分等が電車

を利用して、電車に乘つてゐる間は自分等の生命を彼等に託して居るのであるからして、彼等が正當な生活をしてゐないことに無關心で居るわけには行かない。

けれども、この怠業問題に付いて、二月二十七日の時事新報は『理由なき怠業……罪なき市民を脅す不都合』と云ふみだしの下に次のやうな記事を掲げてゐる。『從業員の生活狀態に就き、自費を投じて詳細に調査せる一市參事會員は語る「三年前と今日とでは、從業員の生活狀態が、全く一變して居る。何しろ五十圓から九十圓以上の收入があるもので、中には一人前八十錢の刺身を食膳に上す者や、妻君に縮緬の羽織を着せるやら却々贅澤な生活振りをして居る者が決して尠くない、而も大部分の者は、全收入の三分の一を貯蓄して居る位であるから、要求に對して、理事者の調査期間を待てないと云ふ筈が無い、故に他に目的があつて斯かる怠業を始めた事は、一目瞭然であるが、市の公有物を勝手に破壞するに至つては、斷じて許す可からざる事だ」』

もし、時事新報のこの記事が事實だとすれば實に從業員等の不都合は斷じて許すべからざるものである。電車は公共機關であることを忘れたるかの如く、市民の仕事には大蹉跌を惹起し、可憐な通學生を徒らに泣かしめ、しかも、それ等の悲鳴や苦情の聲を全く空吹く風と聞き流して、故意に故障車を造り出したり、故障車が入庫する度每に多くの從業員が聲

を揚げて喝采するなど丶は餘りに市民を無視した無責任、非人道、全く、彼等は全市民の敵である。

彼等の要求のうちの一ヶ條八時間制の實施にはもと〳〵我々は賛成である。新社會の勞働者の勞働時間は八時間制が正當であることを我々は認めてゐる。けれども、何事にも順序と云ふことがある。い丶からうと云つて、そう思つた瞬間に直ちにそれが實行出來るものではない。であるから、正當な要求であつても或る期間は當局の都合を待つべきである。

もし、當局が勞働者の要求を不當に等閑に附して置くならば勞働者は市民に迷惑をかける前にあらかじめ事情を市民に公表するがよろしい。理由ある從業拒絶には市民も同情して自分等の一時の迷惑は忘れて彼等に加擔するに相違ないと私は信じてゐる。又、勞資協調會のやうなものもあるからして、果して正當な要求ならば市民に迷惑をかける前に其處へ訴へても事は運べる。聞く處によれば電氣局は彼等の要求に對しては考慮中であつたと云ふことではないか。して見たならば平和に解決する見込みが無かつたわけではない。

それやこれやを總合して見ると彼等は何處迄も無責任であつたと云ふ誹りを免れることは出來ないであろうと私は思つてゐる。そして、この無責任と云ふことは今後の益々共同を強くして行かなければならない新社會に於ては人類の最大な

る敵であらねばならぬことを私は此處につけ加へて置く。

## 米國大統領候補者フーヴア氏と歐洲

大戰中米國は隨分歐洲に補助を與へてゐたが、其のうちでも最も大きな補助を與へてゐたものは今回大統領候補にあげられた前食糧管理局總裁フーヴアー氏であつた。そのフーヴアー氏が今日歐洲國民に對して最も露骨に、『歐洲國民は今は議論をしたり他國に補助を仰ぐことを考へたりしてゐないで唯一生懸命に働かねばならぬ時だ』と云つてゐる。

フーヴアー氏の此のトゲ／＼しい警告は今の歐洲人のためには有效な靜涼劑である。實に今日の歐洲はすつたもんだと騷いでゐないで先づ衣食住の安定を得ることに全力を注がなければならないのである。而して後に徐々と考へればよいのである。食物と燃料の缺乏の結果歐洲に於ける死亡の數は四年間の戰爭中の死亡の數より多いものであると先頃フーヴアー氏は云つてゐた。實際歐洲からの報告によると獨逸以外の中部歐洲に於ては一億五千萬から二億萬の人間が餓死に瀕してゐるとのことである。

それにも拘らず歐洲人が實際に働くことを忘れて政治狂などになつてゐたのでは、如何に米國が人道を重んじ、正義を愛したからとてそれを救いきれるものではない。處で、フウヴアー氏の前述の酷

許に對して歐洲人は云つてゐる。我々は米國にほどこしを求めのではない。唯、商業上信用を呉れゝばよいのだ。そして原料品と機械と一時の食物を借して呉れゝばよいのだ。故に、米國が我々歐洲人を助けることは結局米國の利益になるのだ、と。

けれども、歐洲人のしてゐることは決してこれを立證しない。故に、米國が容易に歐洲補助に手をつけない。歐洲人は食ふに困ることが人民を過激化すると云つてゐるがそれが既でに働かずに食はうとする意志を明らかに告白してゐる。働いても〳〵猶不足を生ずる場合には、其の時にこそ人道に訴へて他國の補助を仰ぐべきだが、今日の歐洲人は働くことを全くそつちのけにしてゐて國民こぞつて政治に熱中してゐると云ふことである。歐洲人がそう云ふ狀態を續けてゐる間は利益の目が最も高い米國人がかまいつけないのは當然なことであろう。

## 露國過激派政府の財政

露國のルーブルの爲替相場の安いことは誰でも知つてゐるが、それでも三百億ルーブルと云へば可なり澤山な金額である。露國過激派政府が半年期の決算を發表したのを見ると、其の收入は二百〇三億四千九百六十二萬七千八百八十八ルーブルで、そして、支出は五百〇七億〇二百六十二萬七千八百八十八ルーブルである。故に、不足金額は三百〇三億五千三

百萬と云ふことになる。

誰でも一通りの常識を持つて居れば自分の半年間の支出が收入の二倍半にもなつて居れば驚いて、どうかして收支の償ふやうな方法を考へずには居られない。處が、過激派政府はそうでない。又、普通の人なら目まいがしそうな其の收支の差を國民も平氣で見てゐる。そして、過激派政府か其の不足を仕末する方法はまことに單純である。則ち、唯、印刷器を廻して其の不足の分、或ひはそれ以上にドシ〳〵紙幣を發行するのである。であるから、唯でさへ安いルーブルが、ドン〳〵安くなる計りである。ルーブルの價は益々下つて殆んど地下知らずになるに反して物價はズン〳〵天井知らずに上がつて行くのだ。

であるから、過激派政府の通貨は單なる印刷局の生產物であつて、そして、ルーブルそれ自身の價格よりも印刷費の方が高い程にルーブルは安くなつてしまつたのである。中でも最も驚くべきことは政府が國民銀行に支拂ふ金利が十六億二千五百六十一萬七千ルーブルだと云ふがこれは此の銀行が紙幣を發行しては政府に借した金の利子なのである。云ひかへれば過激派政府が過去の不足を支拂ふために發行した殆んど無價値な紙幣に支拂ふそれが金利なのである。この馬鹿氣た方法は過激派政府が其の生命を續けてゐる間は續けられるものなのであろう。

實際、此の政府の財政々策は先づ世界

の歴史に例のないキチガイ財政々策である。露國は今日實際上破産してゐる。そして、此の破産の狀態は未だ〳〵いつ迄も續くであろう。今日の過激派政府が倒れて露國の財政が確立し商業上の基礎がうち立てられるのは何年の後の事か一寸見當は付かないとニューヨークの或る經濟雜誌は云つてゐる。

**堀切氏と學問の獨立**

前代議士堀切善兵衛氏とはどんな方か知らないけれども『學問の獨立大に可なりさ、大學の中で毒瓦斯を造つたり毒素を製造するのはいゝが、併し、それを銀座の眞中で發散させられちや困る』と云はれるのに私は全然賛成である。

**紐育サン紙の議會解散觀**

『日本の新選擧法は未だ一回も實際に於て試驗せられず原首相が議會を解散せるは一方に於ては内閣の瓦解を救ふ爲に在りしは云ふ迄も無き所なるも更に一方に於ては一度も實施されざる新選擧法を試驗せんとする誠意に出でしものと見るを得べし惟ふに原首相は米國に於る立法過多の弊害に對し大に顧みる所ありしならん、現今日本には二種のタイプあり即ち一は歐洲にて敎育を受けし人々にして彼等は殆ど急進黨なり他は米國に於て訓練を受けて歸れる人にして彼等は極めて眞面目にして多くは建設的保守思想を有し居れり』私はこの米國歸りが建設的保守思想を有し居れりと云ふことに多大な意味を見出してゐる。

# 美學の眞髓

J. Theodore Merz

現代に生きる我々が現代の特長を摑む事は所謂人生哲學であつて、そして、現代と我々とを調和させて行く最大なる手段である。それによつて我々の進むべき方向は定まるのである。時代の特長を無視し、乃至は唯その一部分を摑むで進むことは甚だ危險である。否、非常な苦痛に陷るものである。人間社會の苦痛は殆んど殘らずこの時代精神なるものを無視するか或ひは知らないことによつて起つたと云つてよい。

十九世紀から今日にかけての時代精神は科學的であり、哲學的であり、否、むしろ批評的であつたと云はれてゐるが、併し、美學的であつたと云ふ人は一人も無い。成程、それは科學的であり、哲學的であり、批評的であつた事は爭はれない事實であるが

併し、美學的でもあつたのである。

この美學的と稱すべき時代精神を無視したり、輕視したり、或ひはそれを有閑階級のみの能事と見てゐたことは今日の經濟萬能の時代の大缺點である。

人は經濟的の滿足を慾望すると同時に、美的滿足を慾望するものであるし、又、慾望しなければならないものである。何となれば經濟的の滿足は人に完全なる滿足を與へない。言ひかへれば經濟的滿足は美的滿足が添はなければ存在しない。けれども、美的滿足は經濟的滿足が添はなくても存在することができる。

故に、我々にとつては經濟的良心よりも、むしろ、美的良心の方が必要なのである。そして、又、美的觀念を持たない人はない。云ひかへれば、多少の趣味を持たない人はないのである。けれども、その趣味なるものは餘まりに人に密着してゐるので多くの人はそれに氣が付かない。從つてそれを利用しないのである。そして、それは皆、美と云ふものを理性的に見ることが出來ないからで、その理性的に見ることができな

い理由は美と云ふ概念が掴めないからである。則ち美とは何ぞやと云ふ焦點がつくれないからである。

この美とは何ぞやと云ふことと、そして、同時に美學とは何であるかをてつとり早く掴むためにクロチエの美學の眞髄を次に擧げて見やう。

クロチエによれば、人間の知識は二つの判然と區別されたかたち或ひは他の言葉で云へば二つの精神的要素から成つてゐる。そして、その二つのうちの一つは形像（事物）で、もう一つは概念（事物の關係）である。そして、形像は目で見られるもの、概念は心で考へられるものである。則ち、形像に關する知識は目から這入つて來る直覺でそして、概念に關する智識は思想を通じて這入つて來るもので論理的である。

直覺、則ち、形像はいつ迄も唯感覺のかたちで止まつてゐるわけには行かない、必ず表現を要求するものである。で、この表現が廣い意味の言語である。が、その表現はあながち言葉である必要はない。線でもよし、色でもよし、音でもよい。何となれ

ばこれ等の三つは廣い意味の言葉であるから。

そして、美學は最も廣い意味に於て言語の學問である。いはゞ美學は一般言語學なのである。であるから、藝術は印象の表現、則ち、直覺の表現である。

これに反して科學はその表現にもう一歩進んだかたちである。概念、則ち、個別的な思想から區別した一般的思想は科學によらなければならないものである。そして、その概念は表現がなければ存在できないものである。併し、表現の方は論理的、則ち概念的の思想が無くても存在出來る。

そこで直覺的智識則ち表現と、智力的智識則ち概念との間の關係、藝術と科學との關係、詩と散文との關係は二重の度の關係であると云ふより外に定義の下しやうがない。その第一の度は表現であり、第二の度は概念であるが、その第一の度は第二の度が無くても存在できるが、併し、第二の度は第一の度が無くては存在できない。

故に散文は無くても詩はあり得るが、併し、詩が無くては散文がありやう筈がない

表現は實に人間の活動の第一の、そして、確定された事實である。詩は人類の最初の言葉であつた。この意味に於て人間は生れながら高尚な詩人であるのだ。わたしは言葉と云つたが、それは直覺と云つてもよい。或ひは又この場合の言葉と云ふのは一般の表現と云つても差支へない。

我々は我々自身を表現する事ができた時に我々は自然の狀態から脫したのである。美的生活に入つたのである。その時に我々は自然の狀態から出てしまつたのである。人間は半分自然の狀態にゐて半分自然の狀態から出ることは出來ない。

美はこう云ふ見地から成功した表現、或ひはむしろ眞純にして單純なる表現であると云ふ事ができる。完成しない表現、則ち、成功しない表現は全然表現になつてゐない。醜とは不完全な表現、つまり、缺點ある表現と云ふのである。

要するに美は實在の反對ではない。云ひかへれば美は遊戲又は虛構ではない。美は生活の增大である。美を通じて我々は我々の生活の增大を見ることができるのである。

# 氣候と勞働

看護界の女王ナイチンゲール孃が嘗て、『食べたいと思ふものは唯單に食べたいと云ふだけではなく、それは生理上必要なものなのである。つまり甘いものを食べたいと思ふ時には自分のからだに糖分が缺乏してゐる時で、生理上糖分を供給しなければならない時である。酸いもの、辛いもの、鹽いぽいもの、其の他あらゆる食物に於てそうである。』と、云つたことがあるが、本當にそうだと私は思つてゐる。昔から女の好むものと云へば薩摩芋、南瓜、など云つて人はそれを嘲弄の意味で云つてゐるが、どの女もどの女も其れを好むので遂いには可笑しいやうな氣分になつたのであろうが多量な血液を必要とする女の體には本當にそう云つた種類の食物が必要なのである。

それと同じやうに氣候の變化と云ふことがあらゆる生物に必要であると云ふことを此の頃委しく研究した人がある。それは東洋の地理に非常に委しい亞米利加のハンテ

ングトン教授である。教授は滿州に小麥の出來ることを發見した世界の恩人である。春夏秋冬とも餘まり變化の烈しくない亞米利加の太平洋沿岸から日本へ歸つて來た時分私は氣候のかはる度每に衣類から室内の裝置からかへねばならぬのが煩しくて『亞米利加にゐる時には夏も冬も室内をどうこうする必要もなし、着物も始終一つものですんだし……………』と、或る奥さんに向つて愚痴を云つた時に、その奥さんは『けれど、一年中同じ氣候では面白くないでせう。冬中寒氣にとぢこめられて地上の一切がちゞこまつてゐた後にそろ〳〵春がきざして梅がチラホラ綻びる頃の氣持ちなどは……………とてもそんな平凡な處では味はれないでせう。』と云はれた。

そう云はれて私はサンフランシスコあたりに住む餘裕のある人達が避暑ではなく、迎暑にわざ〳〵非常に暑い土地を選んで出かけて行く心持ちが分つたやうな氣がした。そして、この氣候の變化はいろ〳〵な種類の食物が人を喜ばせると同時にそれが人々の生理上必要であると同じやうに、人々を喜ばせ、同時にそれが必要であるのだ

と云ふことが分つた。轉地療養も勿論この理からである。

合衆國フロリダの夏は餘まりに暑氣が長く續くので人々の生活は倦み果てゝ居るやうな様子であるが、其處へ少しでも涼しい風が來るなら人々は直ちに活氣づいて活潑に働き出すと云ふことである。又、寒氣に慣れて不活潑になつた時に、その寒氣が一層烈しくなつた時には却つて人は働き出すと云ふことである。それとは反對に温度が上つて來た時には猶人は非常に愉快な刺戟を受けて盛んに働き出すと云ふことは勿論である。

氣候の變化に支配されるのは人間計りではない。植物も亦同じやうな影響を受けることを多くの實驗が證明してゐる。烈しい寒氣の下に植物の成長は一時止まつてゐるが、温度の加はるに從つて又成長を續けると云ふことは誰でも知つてゐることであるが、其の温度が着々と上がつて行き絶頂に達してゐる間は矢張り又其の成長は止まりそして、其の温度が低下して行くに從つて又成長を始めると云ふことである。要は、

最高温度から最低温度の間を往來してゐるのがよいので温度の居坐りはいけないと云ふのである。

温度の變化が人間の體にどう云ふ風に影響するかと云ふことに付いては未だはつきりとした斷言は出來ないが、併し、人間の體の作用のうちで最も重用なもの丶一つは血液の循環である。血液の循環が活潑で制限されてゐなければゐない程血液の組織がよく養はれて血液が純粹になる。心臓や動脈に故障さへなければ血液の循環に刺戟を與へれば與へる程體のためになる。で、温度の變化は其の血液の循環を刺戟する最も有效な力なのである。湯浴、水浴が其の例である。

血液の循環を刺戟する上に於て、瑞典式の入浴は最も理想的だと云ふことである。それは湯と水とをかはる〴〵に浴るのであるが、浴場へ行く時には頭をたれて足をひきづつて行つた者も浴後にはまつすぐに立つて足どりも輕く歸つて來ると云ふことである。で、温度の變化も此の湯と水の變化と同じ效果があるものだと云ふのである。

又、晴天であつたり、曇つたり、雨が降つたり、つまり、乾燥、濕氣、風と云ふ變化も同じ結果を齎すと云ふことである。

併し、變化が急激であつては却つて害がある、やわらかに徐々と來なければならないと云ふことを私達は忘れてはならない。たとへば、雨後、最初の晴天の日は活潑に働けないと云ふことであるがこれは急激の變化の結果だからである。けれども暴風後の最初の晴天はよく働けると云ふことたがこれはむしろ例外であり、そして、又これは生理的と云ふよりもむしろ心理的であるかも知れない。けれども、曇り日は二日目よりも最初の曇り日の方が仕事がはかどると云ふことである。それから、いよ〳〵雨が降ると云ふ日は一番始めの晴天の日と同じやうに仕事ができない。結論して言へば急に晴天になつた始めはいけないが併しそれは直ぐに取り返へして、そして、その晴天が長く續くと又、人の能率は最少限度になつてしまい、それから、一部分曇ると少しくよくなり、全部曇ると又其の上よくなると云ふのである。

又、雨、風、雪、嵐の後に非常に氣持ちが爽快になるのは地上を壓迫してゐた氣壓がとれたからであるが、いづれにしろ、絶へざる天候の變化はあらゆる生物に無くてならぬものだと云ふのである。で、ハンテングトン教授は氣候と人間を馭者と馬にたとへて説明してゐる。則ち、馭者が氣候で馬が人間なのである。教授は曰ふ。

第一の馭者は馬の意のまゝに任せる。すると馬は氣まぐれに走り出すこともあるが併し、結局道ははかどらない。第二の馭者はつゞけさまに鞭を使つて無茶苦茶に馬を走らせる。其の結果、一時は非常に道のりがはかどるが、併し、馬は直きに疲れてしまう。第三の馭者は始めは少しの間鞭を用ひ、それから又ゆつくり歩かせると云ふやうにする。これは第一第二の馭者よりもよい結果を得るけれども併し、未だ缺點がある。第四の馭者は時々鞭を使つて靜かに走らせる。併しながら、この馭者は鞭を使ふことのかはりに大抵は口で馬を進ませる。そして、馬を止める時には靜かに端綱を用ゆる。つまり、急に止めたり進めたりすることのかはりに靜かに進めたり押へたりし

て馬の勢力を保存することを心掛ける。こう云ふ馭者が最大長里を旅して、しかも、前の三者よりも速かに目的地に達する。

で、氣候にはいろ〳〵の種類があるが、第一の馭者は少しも刺戟のない春夏秋冬同じ氣候を意味し、第二の馭者は變化が餘まりに烈しい氣候を意味し、第三は餘まり烈しく、つまり、度々の變化ではないが、併し、強い變化を意味する。そして、第四の馭者は神經をゆるめ過ぎもせず、と云つて神經を痛める程烈しくも強くもない非常に人間の發達に都合のよい氣候を意味してゐるのである。これは、折り〳〵雨もあるし嵐もあるが、併し、其の雨や嵐の作用は丁度よい刺戟を人に與へてしかも其れが壓迫とならず疲勞とならず結果は非常に良好だと云ふのである。

これを子供の敎育に應用するならば、あまり烈しい刺戟を子供に與へてもいけないし又、全く刺戟がなくてもいけないし、つまり、第四の馭者のやうな態度で敎育しなければならない。殊に讀物の選擇に付いては此の工合を了解して置かなければならないのである。

# 心のかげ

原田琴子

○

時雨の降る、うす寒い、不快な日であつた。午後の四時頃にお葬式が出るといふので私は家の前へ出て見た、物見高いこの地方の人達は男も女も年寄も子供も皆外へ出て、その葬列の通るのを待つて居た。家々の軒には寒さうな人々の姿が見えた。

　その葬儀に送られる人と云ふのは、この地方の祭禮なぞにいつも興行する芝居の一座の親方であつた、その親方はこの町の者で、常には旅から旅へ興行して歩いたのであつた。死んだのはやはり旅先のことであつたが、本葬は町でさかんにするといふ評判だつた。



いかにもその葬列の眞先には、この町のどこの家のおとむらひにも見られない、白や青や紅い色の紙で造られた造花や、水仙の花や赤い木の實をあつめた生花や、放ち鳥をいれた大きな籠などがつゞいた。さうしてまた一座の中の樂隊連が『悲しみの曲』か何かは知らないが、とにかく喇叭を吹いて從つてゐた。見物の人々は殆ど感嘆して眺めてゐた。

　その見物の群集のずつとうしろの方に、私の祖父も立つてゐた。背の高い體を更にのびあがつて、兩手を後ろに組んで、じつと口を結んだまゝ。私はふとその姿を見た。そして思はずびつくりして一足退つた。お葬式そのものよりもその祖父の姿が、否その姿に現はれた祖父の心持が、私には限りもなく悲しかつた。祖父はもう七十を越して居た。そしてこの世の生活に得られざるものを求めて居るのであつたから。

○

私の周圍には如何いふものか中年で妻を失つた人が多い。そしてそれが皆まだ幼ない子供を殘してゆかれた人ばかりである。

その人達の中には一年もたゝぬに後妻をむかへた人もあつた、また子供を繼母の手にかけるのはかあひさうだと云つて主婦のない、不自由な家庭生活をつゞけて居る人もあつた。人はいろ〳〵に批評した、ある者は後妻をむかへた人を非難した、またある者はむかへない方の人を心得違ひだと云つた。そして何れも理由は子供がかあひさうだと云ふのであつた。一方は子供を繼母に仕へさせるのをふびんだといひ、また一方では幼ない子供が母なし子で育つて、感情の荒むのを恐れるといふのだつた。

私には何れとも分らなかつた、私はたゞ默つて事の有樣を眺めるばかりだつた。そして事實は、繼母を迎へて大變幸福に睦じく暮してゐる人達もあつた。また何かと爭のたえない家庭もあつた。主婦のない家は――それ



はほんの一つの例しかなかつたが——實際現在見るところでは子供が不幸に思はれた。雇ひ人では何事もうまく行かなかつたし、主人は外へ出て働かねばならなかつたから。

だが一體かういふ問題をきめるのには何を第一として考へなければならないのか？　子供——であらうか、またもし人がこの世に生きるのは幸福に暮さうがためであるならば、その幸福なる生活とは一體なんであらう？親子睦じく、衣食を豊かにその日を送ることであらうか？　私には分らなかつた。人それ〴〵の感情は知るべくもない、たゞ第三者としての私に快よく思はれる事は人々の睦しい現在の暮し振りをみることであつた——

○

私はよく周圍の人達から『お前は幸福だ』と言はれて居る。

ほんとうに私は幸福かもしれない、幸福であらう——けれどももし私が

現在とは違つた境遇に居るのであつても——親しい人も持たず、その日の生活にも事を缺くやうな——やはり私は幸福でなくてはならない、否幸福なのだと思ふ。私はどんなかなしみの日にでもそのかなしみをかなしむことの出來る自分をば、幸福に思ふことであらう。

實際の生活を見るのが私の計畫であつた。私には全く新らしい生活を。私の理論はしツかりして居た。それ故私は人間と人間の心遣と望みと恐れと不幸と喜びとを知るために理論を離れた。そして、人間のいろ〳〵の生活を比較した時人生の目的が最もよく達せられ得たと思つた。——凡ての喜びを含む目的が。私は深く考へ、そして、味つた。

ロバト・ブラオニング

# 落穂集

根本様

拙著『戀愛の社會的意義』に對する御懇切なる御批評を有りがたう御座いました。全文を載せさせて頂いて一々御答へを書きたいのですが御承知の通り小さい雜誌で紙面が足りませんから、唯、御論旨の要點だけをとらして頂いてそれに御答へすることに致します。

『凡ての人間が皆高尚になつて基督教の所謂理想的人物になつてしまいますと皆獨身生活を致すやうになりますから此の地球上には子供が生れない事になります。そして人間が絶へてしまう事になります』と云ふお說を拜讀しました。併し、何時果してそんな子供の生れなくなる時が來るでせうか　如何に基督教の戀愛觀が戀愛を一種の罪惡なりと見て居ても元來人間は食慾と性慾との本能を有つた地上生物から今日迄發達して來たものである以上如何にして此の罪惡がなくなる時が來るであろうか？　又、何時か此の理想の實現さるゝ世の終りに到着したとしても夫れが何で惡いのであろうか？』

凡そ世の中の善と惡、云ひかへれば、ものゝ價値は結果から見ねばなりません　一方には戀愛を罪惡と見て禁慾主義を押し通し子供を生まずに居り、他の一方には戀愛は何であるかなど考へ得ない無自覺な民衆が無茶苦茶に多產をする結果は、丁度惡貨幣が善貨幣を放逐してしまうやうに、質の惡い人間計り多くなつて全體としての社會は不幸計りが多くなると云ふのです。で、要は高尚な人間が戀愛を罪惡視しないで高尚な人間の數を殖やし劣等な人間を感化して行かなければならないと云ふのです。又、『世の終りに到着したとしても夫れが何で惡いか』と仰有ることは人が死ぬのが何で惡いかと云ふのと同じことであろうと思います。死んで行くもの、終つて行くものを善いと云つても惡いと云つてもどうすることも出來ませんが、併し、この地上に生を享けて生きて居る限りは生命を保存し、其の質を改善し　增殖を計るのは生きとし生けるものゝ希望であり大自然の法則に叶なつたものであります。

一「戀愛に對する男子の態度」の中に貴姉は從來の男子の思想が悉く戀愛と結婚を輕視して來たものゝ如く論ぜられたが、果してそうであつたか？　私の思ふには從來は今日よりも多く戀愛と結婚を重視したものと思ふ。否寧ろ性情慾の盛なる青春の期に於て戀愛觀を放任することの危險なりし經驗を得しに非ずや』

戀愛の力は恐しいものであると云ふことだけは古今東西を通じて人は認めてゐました。けれども、男子が婦人の人格を認めず、唯、婦人を男子に便なる道具と見る結果多くの男子は戀愛を單なる快樂の具としてゐました　そして、結婚は必要なものと思つても神聖なものとは思つてゐませんでした。重要視するのと神聖視するのとは其處に大きな差があります。

『而して記者は序文に於て愛慾と性慾と同一物であるものゝ如く論じられたが性慾と愛慾とは到底同一物ではない寧ろ全く別物である。唯、性慾と愛慾とが多くの場合同時に働いて居るに過ぎないのだ』

性慾と愛慾とを別々に取り扱ふことの出來る人は未だ全く今日に於ける高級な文明人になつてゐない、則ち、半文明人であります。少しも愛を感じて居ない對者から性慾の滿足を受け得る人は未だ全く獸性を脫して居ない人であります。

『そして　記者は男子が妻以外の女子に關係せざることを女子にとつて絕大の幸福の樣論ぜられてゐるか夫れが果して幸福であろうか？　家庭に於ける最大の幸福は決して男女の節操のみに限られたる問題ではあるまい　否寧ろ貞操の問題は其の一部に過ぎないのであろう』

人生を全く男子本位にして婦人の心理及び感情を全然無視したお考へです。かりに婦人が今日の多くの男子のやうに勝手に外に男をこしらへたり、夜、うちをあけたりしたら、其の婦人の夫はどんな氣持ちがしますか？　貞操の問題は生活の唯一部に過ぎないと云つていつもと同じ氣持ちで冷靜に毎日の仕事を進めて行かれますか？　女性の心理及び感情は男性よりもこまやかなものであることを御承知置きを願ひます。

『記者は月のうちに一度或ひは二度家を明ける夫を持つ女子を不幸の如く論じて居るが世には月に一夜も家

を明けないでしかも勢力旺盛な男子を夫としたる悲慘なる女子も決して少なくない』

と仰有つて男が妻以外の女に接近することを肯定して居られますが愼しむことをしない人間は文明人ではありません。人間と獸類との違いは此の愼しみがあると無いとの違ひです。

『又、別な腹から生れた兄弟達が父親の死後財産爭ひなどをしてゐるのを見ます時私は其の父親を呪はずには居られません　と記者は云ふが、父親の死後財産爭ひをするのは別な腹から生れた兄弟だけでせうか？同種同腹の兄弟が親の遺產を爭ふのは何でしよう』

自分の命にかへても愛してゐる筈の子を殺したり、敬愛してゐる筈の親を虐げたりするやうなことが廣い世の中にはあります。けれども其れをもつて親の愛や孝行なんてものはありはしないと斷定を下すことは出來ないでせう。例外と一般とを混同してはなりませんそして、一般には妻腹妾腹の子等の間に最も多く爭いは起るものです。

『それから貴姉の友人なる若夫婦の出來事中「夫が他の女に心を引かれて行けば行く程自分は又夫に引きつけられたのだそうで御座います。一層夫が戀しくなつて行つたのだそうで御座います。』と云はれるが、何と云ふ實に美しい優しい事でせう』

本當に浮氣な男のためには大變都合のよさそうな女性です。けれども、女がそう云ふ氣持ちになるのは唯一時の先づ反動と云ふやうなものゝ結果であつて、全く無自覺無人格な男子の道具となつて滿足してゐる女でない限り、一度男からひゞを入れられた心はいつか一度は破裂してしまひます。（其の女も間もなく二人の間を破壞してしまいました。）そして、其の結果の不幸は唯に二人の男と女とだけではすみません。

『記者は、「一家のうちの收入は先づ普通男がとつて居ります稼人である男を家の外にほうり出しますとお金を得る事に慣れて居ない婦人は早速困つてしまいます——其處で離婚法の改正云々」と論ぜられますが如何に改正されましたらそれが實行されませう。離婚法と申せば一種の法律であつて理想ではありません。從て其の時代に應用して充分活用の効あるものでなければ

法律の價値はありません。自ら離婚を要求した男子に對し其の勞銀迄取上る法律が制定されましようか、勞銀は寧ろ肉體の一部である、離婚によつて肉體を排斥し勞銀によつて肉體を要求すると云ふ樣な理論が何れの國、何れの世に成立しませうか？

經濟學上ですら、人間の肉體から切り離すことが出來て交換價値を有するものは物品です　賃銀は人間の肉體から切り離し得るものです。ですから、理由あれば當然差し押へられるものです。母の生活の重要さが社會に認められゝば當然設定されなければならない法律です。

『又、「及び多数の婦人が共力した婦人團體が必要になつてまいります云々」と。これとりもなをさず婦人運働ではありますまいか。記者はさきに婦人運動を輕視して居るやうですが、法律の改正とか婦人の團隊とか云ふものが社會運動　婦人運動等によらないでせうか？寧ろ私は社會運動　婦人運動の起つたのは是等に對する自然の勢ではあるまいかと思はれます』

私の輕視するのは女も人であると力んで婦人獨特の生活を無視し、家庭や子供を忘れて一切を男子と同じやうに律しやうとする運動であるのです。運動其れ自身が悪いと云ふのではありません。從來の婦人運動は其の精神が間違つてゐると云ふのです。

地球は丸いと云ふ事は一般が肯定してゐる事實ですけれども、局部々々を見たならば山あり谷あり川があつて決してまん丸でありません。局部論は此の山、谷川を見て『何で地球が丸いものか』と云ふのと同じことになります。

■奈良縣の辰巳利文樣、名古屋の後藤豐子樣、小出とよ子樣、東京では綾部玉陽樣、江渡幸三郎樣、大阪ではは政世樣、小野廣樣、小倉市の友石アイ子樣、其の他方々からの御親切な又は御奮勵の御手紙を私はこの落穗集の中へ載せさせて頂くつもりで印刷屋の方へ廻しましたがどうしても紙面の都合がつかないので返へして來ました。本當に殘念でしたが仕方がありませんでした。紙上にあげられないだけ、それだけ深く皆樣の御言葉を私の頭へきざみ込んで一層奮勵致します。皆樣にこゝで厚く御禮申上げます。

# 血色(ちいろ)の文字　The Scarlet Letter

ホーソン作

## 廣場（一）

それは今より少なくとも二世紀よりも前のことであつたが、或る夏の朝獄屋の前の徑路(ほそみち)に沿ふた芝地にボストンの住民の可なり澤山が集まつてゐた。そして皆一様に、鐵の金具の篏(は)まつた獄屋の入口の樫の戸を灸(や)きつけられるやうな目をして眺めてゐた。或る外の國民か或ひはニニーイングランドの歴史のもつと後の時代であつたならば、これ等の良民の髭だらけな顔の化石させられたやうな苦(にが)い表情は何か恐しいことが今起りつゝあることを語つてゐると人は思ふであらう。確に其の光景は、時の判事が輿論に

從つて或る名のひゞいてゐる罪人に死刑の宣告を與へ、今や其の當然の刑の執行を豫期してゐるかの如くに見へた。けれども、あの昔の嚴酷な性質の清教徒の中にあつては、そう云ふ種類の推測はひかれなかつた。彼等は唯不精な奴隷か或ひは親の言ひ付けを守らないために親が官憲の手に渡した親不孝な子が鞭打たるゝのを豫期してゐるやうな風であつた。或ひは又德則廢棄論を稱へる人か、クエーカー教徒か、又は他の過激な宗教を奉ずる者が此の町から放逐されるか、それとも、白人の賣つた酒のために亂暴した土人の乞食が森の中に追はれるか、或ひは、又、年とつた意地惡な長官の後家であるヒビン夫人のやうな魔法使ひが死刑臺に載せられるかを豫期してゐるやうな風であつた。

　とは云へ、見物人は宗教と法律を殆んど同じものと思つてゐて、彼等の心の中には法律と宗教がすつかり繋ぎ合はさつてゐて、そして、其の結果

公共的な教訓は穏かなものも嚴かなものも等しく尊敬し、怖れなければならないと思つてゐる國民に適した嚴格な態度を見せてゐた。そして、かやうな見物人からは斷頭臺に立たされた罪人ですらも、到底、同情の目を注いで貰ふことは出來ない。むしろ、冷笑されるであらうと思はれるやうであつた。其の頃の嚴格さと云ふものは、今日ならば唯世間の嘲笑や醜聞を買ふ位ひの罪科も、實に、死刑と殆んど同等位ひの罰を課せられるのであつた。

その夏の朝、見物人の群の中に集まつてゐた女達が、其の日の罪人の罰はどんなものであるかと云ふことに特別な興味を持つてゐたことは特に注意して置くべきことである。その頃の女の感情は未だ今程精錬されてゐないので、機會があれば群集をかき分けて斷頭臺に近かづかうとする程粗野なふるまいを平氣でしてゐた。昔の英國育ちのそれ等の女達は、彼女等から

六七代を輕た彼女等の子孫と比較して見ると、物質的にも道德的にも餘程未だこわばつた粗野なところを持つてゐた。と云ふのは彼女達の娘等は彼女達よりも、より薄い頬の色と、よりきやしやな肉體と、より精緻なる併し褪めやすい美と、そして、より弱い人格とを受け繼いで行つたから。

けれども、其の時に獄屋の戶口のまわりに集まつてゐた女達は、男のやうなエリザベス女王が女性の代表者と云はれても不都合ないやうに凡ての女が男性的であつた時代からは五十年とはへだゝつてゐない期限に、其處に立つてゐたのである。彼女達はエリザベス女王と同國人であつたのだ。彼女達の母國の肉と酒が、その母國の道德上の食物と共に彼女達の血液をつくつてゐたのである。その朝の輝いた太陽は彼女達のはゞの廣い肩とゆたかに發達した胸の上に光つてゐた。彼女達の遠い母國に於て充分熟し、そして、ニューイングランドの空氣が未だ少しも其の色を靑白くしない彼

女達の赤い頬の上にも太陽の光線は輝いてゐた。その上に、彼女達の言葉のうちには、其の意味に於ても音量に於ても、今ならば人を驚かすやうな大膽さと圓滿さとがあつた。

『皆さん、私は今私の思つてゐることを少し計り御話しませう。』とその女達のうちの五十計りになる嚴固な顏した婦人が口をきつた。彼女は猶言葉を續けて、

『私共は可なり年もとつてゐますし、又、名望ある敎會の會員でありますから、あの厄介な女、ヘスター●プリンを私共の手で處置したならば、それは大ひに社會のためになりませう。皆さんはどうお思ひになりますか?もし、あのやくざ女を、此處にかたまつてゐる私共五人が裁判するとすれば、あの判事さんが與へたやうな判決であの女を許すことが出來るでせうか?イーエ、イーエ、私はそうは思ひません。』

すると、他の女が『人の噂によるとあの女の先生であつたデイムスデル牧師は自分の信徒のうちにこのやうな恥しい事件が起つたことを大變悲しんで居られると云ふことです、』

と云ふと、又、他の中年の女が『判事さんは神様を怖れる紳士ですけれど、併し、なさけ心が多過ぎます。そりや、本當ですよ。少なくとも、あのヘスター・プリンのやうな女には、あの額に熱い鐵の焼印を押してやらなければなりません。エヘ、そうしたら焼印を押してやつたらあの奥さんぶつたヘスターが縮み上がつたでせうに。あの馬鹿女が彼女の罪のしるしとして着物の胸に文字を一字縫ひ付けられたつて其れを何と思ふものですか。まア、皆さん見てゐらつしやい。あの女は縫ひつけられた其の文字を胸飾りでかくすでせう。さもなければ異敎信者の飾りものゝやうに平氣でそれをぶらさげて町中を歩くでせう。』（つゞく）

## 編輯を終りて

殆んど私一人の手になるものですから御讀み下さる方があるや無しやと氣遣つて居りましたが、案外よく出ましたので、これも皆樣の御同情による處と本當に嬉しう御座いました。いよ〳〵奮勵、勉强して皆樣の御厚志に報ゆるつもりで御座います

四月號にはあれも載せたいこれも入れたいと大變慾張りましたゝめに原稿が出來上がつてしまつてから枚數が多過ぎてしまつたのに氣付きまして、それから、急に『原宰相と議會解散』を殆んど三分の一に書き直すやら（そして、雜誌『雄辯』四月號に委しく書いて置きました）原田琴子さんの『心のかげ』を半分にするやら『落穗集』も三ツ四ツ書いたのですけれど、それもぬいて皆樣の御手紙を頂戴したこと、それから、根本氏が、私の戀愛觀に就いて長い御批評を下さいましたのを、これもずツと短かくして、それと入れかへるなど大騷ぎ致しました。そのために、いろ〳〵御奮勵の、又は御親切な御言葉を載せることができなかつたのを殘念に思ひます。御書面をおよせ下さいました皆樣の御芳志をこゝにて厚く御禮申上げます。

それから、いくつも〳〵の文章に一々私の名をつけるのは却つて讀んで下さる方にもおうるさいでせうと思ひますから署名のないのは私が書いたのだと御承知下い、反譯も。編輯に關する凡ての事は東京四谷區南伊賀町四一山田わか宛に御願します

### 本誌定價表

| | | |
|---|---|---|
| 一册 | 金二十五錢 | 送料五厘 |
| 六册 | 前金 金壹圓四十錢 | （送料共） |
| 十二册 | 前金 金貳圓七十錢 | 送料共 |

○誌代及郵税は前金の事○送金の際は振替貯金東京四一〇七七番に御拂込みを乞ふ○郵券代用は五厘切手にて一割増○廣告は御照會次第御相談いたします

大正九年三月二十五日印刷納本
大正九年四月一日發行

東京本郷湯島四ノ三
編輯兼發行人　阿部仙太郎

東京神田仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎

東京本郷區湯島四ノ三
發行所　東洋出版社
振替東京四一〇七七番